

# イケメン男子からのアプローチを拒否し 続けていたら、実力行使で身体から落と す脳イキコースに路線変更された

体験版

受け溺愛美形デザイナー×強気受け会社員

受け：千晴（ちはる）

攻め：那月（なつき）

要素：強気受け、敬語攻め、焦らし、言葉責め、前立腺責め、乳首責め、結腸責め、脳イキ等

最近、厄介な人から気に入られている。俺たちが知り合ったきっかけは、大きな企画が終了した後、打ち上げと称されて開かれたパーティーだった。俺からしたら取引先が大勢いるパーティーは半分は営業場所で、当然楽しくはない。始まる前から気を抜けない時間になると諦めていたら、更に面倒な事案が発生した。しかもそれが、パーティー終了後まで尾を引くことになろうとは。

「千晴さん、今日も会いに来ましたよ」

「そうですか、俺は頼んでませんけど」

「いいんですよ、僕が会いたくて来たので」

今日も今日とて俺に齒の浮く台詞を言うてくるのは、あの日初めて会った那月さんだ。彼はデザイナーをしていて、俺は知らなかったがそちらの世界ではかなり有名人らしい。そして彼はとても顔がいい。背も高いし、立ち振る舞いも落ち着いているし、俺が言うのもなんだがまるで王子様みたいではある。

そんな彼から、「会いに来た」と言われたい女性社員は山ほどこいそうだ。なのに、なんで俺だ。どうして俺が猛烈なアプローチを受けているのか、自分でもさっぱり分からない。

「ところで千晴さん。そろそろお昼の時間ですが、今日のお昼はどちらで？」

「外で適当に食う予定です」

「僕もご一緒させていただいても？」

「断っても来るんでしょ、どうせ」

「いえ、その場合は別で食べようと思ったはずが、偶然にもお店が一緒になったという体になります」

「建前と本音が混じってますけど」

「おや、これはうっかり」

最初はこうして距離を詰めてくる理由は、俺を通して会社と繋がりたいからだと思った。でも上司や同僚から聞いてみれば、既にやり手のデザイナーである彼

は、うちの会社と何度も仕事をしているらしい。つまり、俺のツテで会社との繋がりを狙っている線は薄い。

となると、考えられる説は少ない。その中で最も可能性が高く、かつ考えたくない仮説としては、那月さんが俺に好意を持っていて、リアルに関係を深めたいと考えている説だ。しかし好意を持たれている俺のスペックは、華々しい職歴もなければ、見た目も特にパツとしない。本当に、なぜ俺なんだ。もっと美人な若い女の子もたくさんいるのに。俺とランチをしてる場合じゃない。あっちにいけ、ほら、あの新入社員のグループだってアンタを見ているぞと思うのだが、那月さんが見ているのは俺だけだ。

「...俺、普通にラーメンとか食いますよ。那月さんもそれでいいなら一緒に行きましょう」

「いいですね！ぜひそうしましょう。もうお店は決めてるんですか？」

「何件か目星つけてるんで、その中で空いてそうなところにしようかと」

正直俺としては、那月さんと仕事上の付き合いがあるから関係を悪くはできないものの、それ以上先に進む気は全くない。だから彼から受けるアプローチを全て無視して、そこそこの距離感を保ちつつ、中身の無い会話をして乗り切っていた。

だが、そうして進展のないまま安全に毎日を過ごしていた矢先。のっぴきならないトラブルが発生した。俺のデスクの斜め向かいで電話に出た上司が、こちらも驚く顔をして大きな声をあげる。

「えっ、データが飛ばせない！？」

俺を含めた数人が、ただ事ではないと上司を見た。その視線の中心にいる彼は、慌てて耳にスマホを挟みながらパソコンを操作している。

「なるほど、回線トラブルで…。はい、いえ、データが作成済みであれば、納期に間に合うので問題ないかと。そうですね、業者さん待ちだと、ご自宅から来るのは難しいですね…。いえいえ大丈夫です！データは取りにいかせますんで！ええ、もちろん千晴ですね、はい、本人もいって言ってます」

そして上司が、チラ、と俺を見る。何一つ事態を把握してないにも関わらず、俺の了承なしに何かが決まった。本当は今すぐなんの話ですかと聞きたいが、緊急連絡のようなので電話が終わるのを待つしかない。

ほどなくして、ふう、と額に汗をかいた上司が電話を切った。それから彼はデスクの引き出しからUSBをひとつ取り出し、デスクから身を乗り出して俺に渡してくる。

「千晴。頼みごとがあるんだが」

「電話のやつですね？なんの話だったんですか？」

「那月さんの家の回線が壊れたらしい。データの締め切りは明日の午後だけど、それまでネット回線が復旧できるか分からないって言われた。だからお前が家まで行って、USBでデータ取ってきて」

「俺が今から行くんですか！？那月さんの家に！？」

「向こうの指名だ。行かなきゃ案件が丸ごと吹っ飛ぶ。幸い締め切りまで余裕はあるし、いつ来てもらっても構わないって言うてるから。今日の仕事片付いたら速攻で那月さんの家に行って、明日の朝会社に持ってきてくれたらそれでいい」

「まあ…。行くしかないんで行きますけど。今時社外にデータ持ち出すの危険すぎませんか？」

「そこはお前を信じてる。じゃ、頼んだから」

ポン、とUSBを手渡した上司は、念のために他の部署にも連絡を入れているようだ。体のいいパシリに使われた感は否めないが、ここで必要以上に文句を言うほど子どもでもない。事が事だし、回線トラブルに関しては仕方ないだろう。明日の午後までと考えれば時間に余裕もあるし、今日は早めに仕事を切り上げて那月さんの家に向かうとしよう。

そして仕事を終えてから、上司から教えてもらった那月さんの家に向かった。予想通り綺麗なマンションの部屋に入ると、普段よりラフな格好の那月さんが出迎えてくれる。

「千晴さん！本当にすいません、こちらの不手際で来ていただくことになってしまっただけ…」

「いえいえ、お気になさらないでください。トラブル対応は慣れてますので。一応USBに入れる前に、完成品のデータを見せていただいてもよろしいですか？」

「もちろんです。こちらの部屋どうぞ」

少し慌てた様子的那月さんは、俺にスリッパを出した後、何個かある部屋のひとつに案内した。小さめの部屋の中には大きなパソコンとモニターが置かれていて、周りの本棚にもぎっしり資料が詰まっている。見るからにくつろぐための部屋ではないので、どうやらここが彼の作業部屋らしい。そうして部屋を眺めるうちに、那月さんは少しパソコンを操作して、俺に完成品のデータを見せてくれた。クライアントが最終的にどう言ってくるかは分からないが、データとして出来上がってはいるので、これで問題なさそうだと俺も頷く。

「ありがとうございます。確認させていただきました。では、こちらのUSBにデータのコピーをお願いします」

「分かりました」

他の案件の仕事もありそうなので、あまりじろじろ画面を見るのはよくないと思った俺は、本棚に並んだ資料や、机の近くに置かれた観葉植物を見ながらデータが移されるのを待った。それからすぐにUSBを抜き取った音が聞こえたので、パソコン画面から俺の方に振り返った那月さんから、重要データの入ったUSBを受け取る。

よし、これでやるべきことは済んだ。あとはこれを絶対に紛失せずに会社まで持っていくだけだと思っていた時に、那月さんから声がかかる。

「ところで千晴さん」

「なんですか？」

「あなたの会社には嘘をついたんですが、実はこの家の回線、壊れてないんですよね」

「...は？」

「でも千晴さんとお近づきになるには、少々姑息な手でも使わないと無理かと思って」

彼の発言に、俺の思考は一時的に固まった。意味が分からない。嘘をついた？会社に？データが出来上がっていないならまだしも、完成しているのになぜと彼を見れば、いきなり手首を掴まれて狼狽する。

「ッ！？な、なにするんですか、離してください！」

「千晴さんが僕に振り向いてくれないのは、まだ体の相性を確かめてないからですよ？せっかくですから、今日確かめてみませんか」

「いいいいいい、嫌ですっ、遠慮します！意味が分かりませんし！てか、俺はデータだけもらえたらよかったんで！」

「なるほど。では、実はそのUSBの中にデータは入れていないって言ったらどうします？」

「え？」

「もちろん僕はあなたにデータは渡したと言いますし、データ回線も壊れていたことにしますよ。その場合は納期に間に合わなくなったら、千晴さんの責任になってしまうでしょうね」

は、と息が漏れる。那月さんからデータは入れていないと言われたが、真偽は分からない。だが本当にデータが入っていなかったら、俺は空っぽのUSBを会社に持参することになるだろう。それは避けたいけれど、今ここでUSBの中身を確認するには、彼のパソコンを借りるしかない。でもきっと、貸してもらうためには那月さんの言うことを聞かなければならないだろう。

あの時、データを移行しているかちゃんと見ておけばと思った。でも、今更後悔したところで遅い。いや、どのみち無理だったんだ。きっとここに来るよう仕向けられた時点で、俺の運命は決まっていた。

「悪いようにはしませんから。ちょっとだけ、僕に付き合ってくださいよ」

呆然と立ちすくむ俺を、奇妙に優しい手つきの那月さんが抱きしめてくる。そんな俺を促すように別の部屋に誘導する彼が、今は本当に恐ろしく感じる。

何をどうしたら那月さんの気が済むのか分からないまま、俺は言われるがままに服を脱がされた。ギリギリ下着とワイシャツは着るのを許してもらえたが、これも今からどうなるかは不明だ。それなのにベッドの真ん中に座らされて、不安要素は増していく。そんな俺を、後ろから抱きしめてくる那月さんにも恐怖を感じる。



彼の触れ方は、妙に生々しかった。ずっと首筋に近づく顔の感触や、腰に回した腕で彼の方に引き寄せられるのが、本当に恋人にするような仕草で怖い。背中に張り付く体温と、皮膚を通して感じる彼の鼓動がリアルで、那月さんの興奮が伝わってくる。

これで彼が、満足してくれたらいいが。でもこれ以上の事が行われたら、生半可な悪戯では済まなくなりそうだ。

「あ、あの、那月さん...！俺、本当にこういうのは、ちょっと...」

「どうして？嫌ですか？」

「んんっ...！」

ただ、不思議なことにこういう状況でも身体は繊細で、耳に息がかかっても感じてしまう。ぶわりと頬と耳が熱くなった。それを隠したかったけれど、あまり変な態度をとると那月さんを調子づかせてしまいそうだ。冷静になれ、どうとも思っていないふりをしろと、ぎゅっと目を閉じてやり過ごす。

すり、すり、とワイシャツの上からゆっくり身体を撫でられるだけでも、時間とともにゾクゾクしていく。それを彼に悟られないよう、必死で唇を噛んで我慢した。後ろから当たる息遣いが熱っぽくても無視だ。余計な事を考えたら負けなんだ。

俺がそっけなかったら、いつかは那月さんも飽きるはず。俺はデータがもらえたらそれでいいんだ。ここには二度と来なければいいんだから、少しの辛抱で事足りる。

仕事のためだ。これも大事なデータのためだからと、どうにか自分を納得させる。

「ふ、う、う、っ、ん、ん...！」

「さっきから、少し身体をよじる回数が増えてきましたね。もどかしいですか？」

「や...！違い、ます、俺は別に」

「服の上からじゃなくて、直接触ってほしくなってきました？」

「っ、は...！あ、や、なってな、い、ん、んうう...！」

カリカリと乳輪の下を指で引っかけられると、ぐっと性感が増すような感じがして嫌だ。言われた通りに身をよじると、ほら、またですよと耳元で声がする。でも今度こそ動くもんかとじっと身を固めるつもりでいても、ふう、と耳に息を吹きかけられると肩が震える。

「ひううう...ッ！」

「あんまり我慢していたら、もっともっと千晴さんの身体が敏感になってしまいますよ？僕はそれでもいいんですけど、千晴さんは困るんじゃないですか？」

「ふっ、う、や、も、やめてください...！」

「本当にやめていいんですか？今やめてしまったら、千晴さんはもどかしいままになるのに？」

「んあ、ああ、あっ...！」

するりと足の付け根の際どいところを撫でられると、ぞわわっと腰に淡い快感が広がる。じんと疼く股間のあたりが恥ずかしくて、つい那月さんの手を握ってしまった。

「千晴さん。手をどけてください？」

「ッ、でも、でも...！」

「千晴さんが言うことを聞いてくれないなら、データを渡してあげませんよ？」

「～～...っ！」

だけれど、抵抗は許されない。データを人質に取られている俺は、あくまで那月さんの言いなりだ。悔しいけれど、彼の邪魔はできない。

そろりと手を離すと、いい子ですねと耳を舐められた。その不意打ちに思い切り反応してしまったのに、あえて何度も耳を舐めてこないのが憎らしい。ゆっくりと太ももを撫でて、脇腹から胸までを撫で上げて、時に胸のあたりをしつこく引っかく。あくまで決定打は与えないまま、じっくりじっくり高められていく。気が付けば俺の方が、那月さんよりも荒く息を吐いていた。何度も何度も生唾を飲んで、勝手に先の刺激を想像してしまう。乳首の周りや股間の近くを触られると、ついそこをもっと触ってほしいと思うようになっていた。

「んふ、ッ、は、はあ、あ、あう、ん、んっ...！あ、あ、っ、っっ...！」

ぎゅう、とワイシャツの裾を握る意味が変わってきている。最初は那月さんとの触れ合いへの嫌悪感を耐えるためだった。でも今は、自分を律するために握っている。

ダメだ。エロい方に流されるな。那月さんの言うことを聞いているのは、あくまでデータのためのはずだ。俺が触ってほしいと思うのはわけが違うだろうと、高まる身体を理性で押さえつける。

だけれど、身体は素直だった。だから恥ずかしい反応をしているのを、那月さんから指摘されてしまう。

「見てください千晴さん。あなたの下着、とってもえっちなことになってますよ」

「あ...！や、嫌だあ...！」

なるべく目を閉じていたから気が付かなかったけれど、彼から言われて見てみたら、股間周りがあられもないことになっていた。 TENTを張る下着は、中で昂る熱をありありと形作っている。勃起している理由はひとつで、生理現象だとしても言い訳はできない。しかも紺色の下着は先端に付着した部分だけが濃いシミを作っていて、先走りの量を物語っている。

なんだよこれ。濡れてるし、パンパンだし、分かりやすすぎる。期待してますって言ってるみたいなもんだ。嫌だ、見たくない、こんなの違うと、俺は前かがみになって股間を隠した。

「いや、違う、違うんですっ、これは...！」

「ダメですよ、身体を僕に預けてください。足も開いて」

「そ、んなっ」

「...大事なデータ、いないんですか？」

「う、ううう...！」

でも、もちろん俺に自由はない。那月さんが隠すなと言うなら、俺は大胆に足を開くしかない。嫌なのに、見られたくないのに。些細な触れ合いで完全に立ち上がった場所を晒しながら、まだまだぬるい触り方で焦らされる。

ただ、明らかに俺の感度は上がっていた。だから同じように撫でられるとしても、一つ一つの刺激は重くなっている。両側の太ももに指先をつけられて、そっと円を描くように触れられると、腰が勝手にカクついて止まらなくなる。

「あう、う、ああ、それ、それええ...っ！や、ああ、やめ、て、待ってえ...！」

「そう、いい子ですね。千晴さんはきっと、上手に気持ちよくなれる人だと思っていましたよ」

「んゝ あ、あ、あふ、うううんっ！」

「感じるのは隠さなくていいですからね。気にせず可愛い声も出してください」

「はっ、はっ、ッんんんっ！あ、や、だめ、だめえええ...ッ！」

「ねえ？こんなにやらしく腰をガクガクさせて...。ダメにされちゃう」

「ひいいんっ！」

カリ、と気まぐれにひとつの指が、熱の根元を引っかく。それだけでビクンと大きく身体が弾んだ。露骨な反応を見た那月さんは、気をよくしたのか耳も舐めて

くる。相乗効果で思い切り前かがみになったら、こら、とたしなめられた。その声にすら感じるなんて。自分の変態的な部分を自覚させられると、ますます惨めになって、心の防御力がすり減っていく。

いっそ、高まり過ぎているからいけないんじゃないかとも思う。抜けたらいいのに。自分で擦って、この熱を吐き出せたら。きっと妙な気分も晴れるのに。でもそれはできない。那月さんの前でそんな破廉恥なことをするなんて、俺のプライドが許さないから。

けれど、的確な言葉とじれったい愛撫で、俺の身体は既に限界を迎えていた。

「んん、やらしい千晴さん。どんどんエッチになっていきますね？」

「んや、あ、や、だ、もおやだああ...！」

「こんなにパンツをぐっしょり濡らして、嫌なんですか？嫌なのが感じるんです？」

「っ、ち、がう、これは、これはあ...っ！」

「ほら、僕がいじめたらまた濡れてる。大好きなんですね、こうやって焦らされるのが...」

「〜〜〜ッッ！あふっ、んん、あ、あああ...！！」

恥ずかしい部分を指摘されるほどに、高まる身体が嫌だ。なのにぞわっと昂る感覚が度を越してきている。明らかに、何かがヤバい。でも何がヤバいのかは分からない。その正体を見つけられないまま、言葉巧みに全てを操られていく。

「敏感な千晴さんなら、こうしているだけでイっちゃうんじゃないですか？」

「はひ、う、うゝっ...！そんな、ことはあ...っ」

「僕から撫でられて、気持ちいいところを触ってほしくて限界ですもんね？本当は早くイッてすっきりしたいんでしょう？」

「っひ、ひいい...！」

確かに、抜きたいとは思っていた。触ってもらえたら、今すぐ射精出来るところまできている。だけれど、那月さんは肝心なところは触ってくれない。かわりにお腹のところに撫でられると、ずくんと腹の奥が疼く。なんだよこれ、めちゃくちゃ切なく感じる。おかしい、腹を撫でられただけなのに。身体の芯が喜んでるのはどういう事なんだと困惑する間も、悪魔の言葉が俺を良くない方に導いている。

「千晴さんの身体、僕が撫でるとびくっ、びくってしますね。イキたいイキたい、切ないよおって言ってますよ？そんなに意地張ってないで、一回気持ちいいことだけ考えてみたらいいじゃないですか。感じるでしょう？身体のあちこちが」

「は、はっ、はう、うううん...ッ！」

「こうやって際どいところを撫でられたら考えちゃうでしょ？だらだら先走り流してるおちんちん、ぐちゃぐちゃに扱かれたらどうなっちゃうだろうなって」

「んああ、あ、あああ...！」

触られてはいないのに、彼の言葉で想像してしまう。あられもない格好で、思い切り扱かれた自分を。そんなはしたないことを考えたら負けだと、自分であれだけ律したのに。一度思考の沼にハマったら、簡単には抜け出せない。

触ってほしい。気持ちよくなりたい。いや、今でも気持ちいいし、いっそのまま集中したらイケるんじゃないか。

そんな事を考えたら余計に彼の思うつぼなのに、期待値が上がり過ぎて止まらない。マズい、このままじゃ本当にマズいのに、ブレーキが効かなくなっている。

「ほら、いい感じに高まって来てるじゃないですか。このままイっちゃいましょうよ」

「ひぎ、ッ、あ、あっ！」

「いいんですよ、どこまでもエッチになってくれて。ほおら、僕が頭を真っ白にするお手伝いしてあげます」

「ふぎ、いいうっ！！！」

身体は既に、爆発一步手前だった。それでもなんとか踏みとどまっていたのに、那月さんが追い打ちをかける。

そっと頭を抱えられたかと思うと、片方の手で耳を塞がれた。そして空いている方の耳に、ねとりと舌が這う。じゅる、という唾液の音がやけに頭に響いて、ビリッと背中に衝撃が走った。なんだこれ、めちゃくちゃ感じる。やめてくれ、2回も3回も続けられたら頭が焼けてしまうと、俺は出来る限り彼から離れたかった。なのに反対側を押さえられているから、距離は一定をキープされてしまう。



「んひ、ッ、あああ、だ、め、だめええゝ ええ...ッ！ま、って、俺も、お、あ、あっ...！！？」

はむ、はむ、と甘く耳を噛まれるのもたまらない。じんじんと股間が疼く。ダメだ、腰がありえないくらいガクガクしている。おかしいのに、絶対におかしいのに、高まるばかりで止まらない。そのまま最後の引き金を引くように、ゆっくりと下腹部を撫でられて、くにりと優しく下着の少し上を押された。その瞬間、頭の中で何かが弾ける。

「んゝ ～～～～～.....ッッッ！！！！？？？？うは、あ、ああああ、あゝ ～～～っ！！！！」

強烈な電流でも流されたように、身体が大きく痙攣した。その後数回びくん、びくんと全身が弾む間も、視界が真っ白になる。くにり、くにりと下腹を押されると、ぎゅんと腹の奥が疼いて、何度も体内の快感中枢が破裂する感覚が襲う。

「ひぐんっ！あ、あう、うううんん...ッ！！」

「さすが千晴さんです。あなたなら、出さなくても上手にイケると思っていました。どうですか？一回イク度に、お腹の奥がゾクゾクしてくるでしょう？ここを優しく押されたら、切なくてきゅんきゅんしちゃいますね？」

「あゝ っ、あふううっ...！ふぐ、う、ッ、あ、あああ、あんんんゝ っ！」

「んん、かわいい、かわいいですね千晴さん。あなたが嫌って泣いちゃうくらい、このまま何回もイかせてあげます」

「んく、う、うゝ ～～～…っ！あゝ あ、も、待つでええ…！おかひ、い、俺  
今、あゝ、どうなっ、ンンッ、ひ、ぎ…ッッ！！？」

バツン、と一気に浮上して、元に戻る前にまた高みに連れていかれる。待ってくれ、状況が掴めない。俺は今、一体どうなっているんだ。分からない。分からないのにまた身体がおかしくなる。気持ちよくてふわふわしたまま返ってこれない。だらあ、とだらしなく涎が垂れても飲み込めない。かわいいです、もっとイッて、エッチになってと声をかけられると、脳の中まで犯されている気持ちになった。

「ああああ…！ああう、うっ、は、はあ、あゝ あああああ…！！」

「とってもやらしいですよ、千晴さん。僕まで我慢できなくなってしまうです」

「ふっ、ん、ンンンッ！！？んんうう、ッ、ん、んんんぐっ！！？」

抱えられた頭を強引に後ろに向けられて、そのままキスされた時は、さすがに抵抗しなければと思った。なのにキスすら気持ちよくて、頭が更にぼうとする。深く舌を絡めたいわけじゃないのに、すりすりと臀部を撫でられると、そっちに気がとられて手が止まる。

縋ってはいけない腕にしがみついていた。力の入らない両手は、まるで那月さんを求めるように離れない。いつの間にか脱力していた俺は、徐々にシャツのボタンを外す手を止めることすらせずに、ただキスに没頭してしまう。

「ん、っ、ふう、ん、んん…」

「段々素直になってきましたね。大丈夫ですよ、僕に全部任せてくれたら。何もかも忘れてしまうくらい、とっても気持ちよくしてあげますから」

「う、あうんっ！」

しつこいくらいに服の上から焦らされていた乳首に、ようやく手が届いた。繊細な指先が、下から上に軽く突起をなぞるだけで甲高い声が出てしまう。それが恥ずかしくて手で口を覆うと、くにくにと両乳首が指で挟まれてつままれ始めた。人差し指と親指で優しくきゅっと挟まれると、ぞくんと腰が痺れて、ついその場所に目をやってしまう。

「っ、ふ、ふっ、ん、ンっ！んふ、う、ううう...！」

「どうしたんです、急に恥ずかしがって。さっきまではあんなに可愛い声を出してイキまくってたじゃないですか」

「ん、っ、ち、が、ちがう、違います...！んひ、い、あ、れは、ちが...っ！」

「...そうですか。まだまだ素直にはなってくれないみたいですね...。残念です」

「ひ、あ、〜〜〜ッッ！！？」

ただ、俺がしょうもない意地を張ると、那月さんは分かりやすくため息をついた。それからお仕置きと言わんばかりに、薬指と人差し指で上下に乳輪を広げた後、くびり出た乳首を中指でぐりぐりと押し込んでくる。それがバカみたいに気持ちよくて、俺はバンッと全身を跳ねさせて感じまくった。多分両手で口を押さえていなければ、相当大きな声を出していたと思う。

「あふ、う、ううんッッ！！！！ひぐ、ッ、んんん！！」

「ああほらやらしい。乳首だけでこんなに感じて。千晴さんの身体はエッチになっていったのに、僕に嘘ついちゃっていいんですか？僕、あなたの身体をもっとダメにもできますけど」

「ひ、う、ッ、ああ、ゆ、るひ、で、や、もお、もおお...っ！」

「いいえ、許しません。乳首でイクまで反省させます」

「~~~~っっ！！？っふ、うう、っく、うううんんっっ！！？」

でも俺はまだ、声を出さない分羞恥を減らせたと思っていたから、口を塞ぐ判断は間違いではないと思っていた。だけれど、それが甘かったと思い知らされる。那月さんに完全に背を向けて座っていた俺は、急に体を傾けられて、ぐるんと天井を向くような格好になった。右側是那月さんの胸に、左側は彼の腕で支えられる。彼の上に横抱きにされた俺は、一瞬何が起こったか分からず困惑した。だから、判断が遅れた。ぐっと胸に彼の顔が寄せられても、手を伸ばすのが間に合わなくなる。

「やっ！！？嫌だ、待って待っ、ッ、ああああああっっ！！！」

ねとりと、唇の中に収まった乳首が軽く舐められた。その衝撃に、声を押さえるなんて発想は追いつかない。思い切り感じて、彼の腕の中でのけ反った。その身体を支えられて、次は左右に弾かれる。はむ、はむ、と唇で甘く噛まれた後、優しく吸われるともうどうにもならなくて、那月さんの頭を抱えて足をバタつかせてもがいていた。

「ひうううんっ！！あああダメダメ、ッ、んんあああ！！感じる、それ感じ過ぎちゃ、あ、あゝ あああっ！」

「そうですよ。千晴さんは乳首を舐められてとっても感じちゃう身体なんですから。イッてないなんて嘘をつくのは許しません」

「ん、んっ、だ、ってえ...！俺、こんな、あ、あ、えっちじゃ、ない...ッ！」

「まだ意地を張るんですね...。それならやっぱり、自分から認めてもらうまではここだけをいじめますから」

「やっ、嫌あっ！んん、ッ、だめだめ、乳首だめえええ...！んんんっ、ひ、い、いうんっ！いや、あゝ、吸うのはだめ、ホントに、だめ、ううう、うっ、ンゝンんんっっ！！！」

もしかしたら俺がここに来て、ベッドに座ってからすぐに乳首を舐められていたら。ここまで感じることは無かったのかもしれない。だけれど、じっくりじっくり時間をかけて高められて、変なイキ方をしてからは、完全に身体がおかしくなってしまった。耳を舐められてもイクまでに改造されたんだから、乳首を舐められてもイクに決まっている。だけどそれを認めたくなくて、俺は最後の最後まで抗った。

とはいえ、抗っても気持ちいいものは気持ちいい。左右を交互に舐められて、もうだめと泣いても吸われ続けて、時には周りを舐めて焦らされる。舐めてとねだったら終わりだと分かっているのに、つい、つい、と乳首の上を舌が掠めたり、指でそっとなぞられると、うっかり腰を浮かせて求めてしまう。

「うはあああ...ッ！あああ、あ、あううう...！」

「そんなに胸を反らして...。もう限界でしょう？さっきみたいに舐めてほしくてたまらなくなってる」

「っひ、う、うう...！」

「まだ煮え切りませんか？なかなか強情ですね、千晴さんって」

「はふうんっ！！？」

そんなタイミングで、にゅくりと一回だけ下着の上を撫でられた。濡れっぱなしの下の方には全く触れられなかったから、不意打ちがかなりク。思い切り声をあげてしまった。なのにたった一度の刺激で火をつけてからは、あえてまた下には触れずに、ちろ、ちろ、と乳首をむごいくらいに優しく舐められるだけの責めに変わった。

「うは、あ、ああ、っ、〜〜〜っっ！」

「ん、ふふ、泣いちゃってかわいいですね？ね、もう我慢は嫌でしょう？僕、千晴さんが気持ちよくなるのは責めてませんよ？だからこんな生殺しみみたいなのは終わりにしませんか？」

「っ、で、も、でもお...っ！」

「大丈夫、一回だけでいいですよ。『嘘ついてごめんなさい、ちゃんと乳首でイクまで舐めてください』って、あなたはたった一回言うだけ。聞いているのは僕だけです。それで思いっきり気持ちよくなれるんだから、大したことじゃないですよ」

「あ、う、うう...！」

「ほら、言って？言ってくれたら、さっきみたいに...」

「あは、あゝ、あああああ...ツツ！！」

もちろん、彼の言うことを素直に聞けば楽にはなれる。でも言ったら、何かが負けな気がする。本当は言いたくない。嘘でも乳首でイキそうな自分を認めたくない。

だけれど、ぬり、ぬり、と優しく下着の上を撫でられて、ちゅくりと乳首を吸われた時に、もうダメなんだと悟った。一回くらいなら耐えられる。でもこれを、何度も何度もやられたら、俺は絶対に折れてしまう。だったら苦しま時間は短い方がいいと、俺は彼の頭を抱えて叫んでいた。

「ああ、あ、も、ごめんなさいいっっ！！ゆるし、でっ、も、嫌ああっ！ちゃんと舐めてくださいっ！乳首、で、イキたい...！焦らさないで、もう、もうう...っ！」

「よく言えました。やっぱり千晴さんは、賢くていい子ですね。ご褒美に、イクするまでたくさん可愛がってあげます」

「んはああああっっ...！！！！ああん、んっ、んんんっ！はあ、あ、気持ち、い、乳首、ぎもちい、いい、はあっ、吸うの、も、っと、あ、あゝああああっ！！」

そして那月さんにへりくだと、彼は心底満足そうに俺を見つめた後、約束通りたっぷり乳首を舐めてくれた。焦らされて期待が膨らんだ場所を舐められると、もう全然抑えはきかない。頭と腰のあたりに次々と快感が送り込まれて、ぐっと

高まる。さっきよりも強めに吸われた時なんて、このまま昇天するんじゃないかと思うくらい良かった。

ただ、気持ちいいばかりの時間はそう長くは続かない。しつこく舐められ続けると、全身がガクガクするようになっていく。それから更に吸われると、終わらない快感が怖くなった。感じるのはともかく、徐々に度が過ぎた快感に変化している。もしもこのまま続けられたらどうなるのかと、未知の絶頂の気配を感じて焦った。

「ふうううんン`ン`...!!んは、ああ、あ、那月さ、あ、ま、って、待ってええ...!んん、俺、変、なんか変で、ッ、今、ガクガクってえ...!」

「ん〜?んふふ、なんででしょうねえ、それは」

「っ、あ、ん、だからああ...ッ!止まっ、ん、止まって、一回とま、あゝ...ッッ!!」

「だめだめ、ガクガクするくらい感じてるのに、今止まるわけないでしょう?千晴さんは頭が溶けるまで、乳首でイクイクさせられちゃうんですよ」

「そ、んな...っ!あああ、んんや、あ、っ、うゝ〜〜〜っ!!?」

でも俺は、はっきり言って那月さんをナメていたんだなと、彼に弄ばれている最中に自覚した。なんだかんだ俺に好意を抱く彼は、俺から嫌われないようにある程度の思いやりはもっているだろうとか、最終的に俺に甘いだろうと思っていたんだ。



なのに、蓋を開けてみたらどうだ。止めてと言っても止めてくれないし、俺が泣いても那月さんは笑っているじゃないか。振り切っている彼に、俺はいっそ恐怖を感じる。

マジかよ、この人ガチじゃん。単に悪戯でちょっかいを出してやろう、ぐらいのノリじゃない。俺を本気で落とそうとしているんだと、今になって実感している。だけどそれが分かったのは、既に乳首で何回もイカされて、身体が痙攣しまくっている時だ。壊される、俺はこの人に身体をぶっ壊されると、彼の腕の中で必死でもがいていた。

「っは、はふ、う、ううううんっ！？っひ、ま、まだ、今まだイッ...！？うあ、あ、だめ、ちょっと待っ、嫌、やあああああっっ！！」

「んふ、美味しいです。ずっと舐めてたくなりますね。千晴さんの愛らしいところは全部。だんだん感じるやり方も分かってきましたし」

「ひん、んッ、んンンっっ！！うあ、ああああ...！ふ、ふっ、っぎ、今はやだ、やだああああ！ビクっ、で、なってるから！終わんなくなるから！！」

「終わらなくてもいいでしょう？」

「いや、あ、あっ、もお嫌あああっっ！！乳首イクっ！ッ、あ、んんんううっ！！だ、め、助けて、もおイクの許してえええっ！！こわ、い、止まんないの怖いいっ！！」

「はあ...。かわいい、イキ過ぎて泣いちゃう千晴さん...。こんなにイッて怖いですか？もう嫌？」

「ッ！！ッッ！！」

やっと中断の気配をチラつかされた時は、首が千切れるんじゃないかってくらいに頷いていた。死ぬ、イキ殺されると、この時の俺は本気で思った。だけれど俺の想像以上に粘着質な那月さんは、まだまだ俺を陥れる計画を練っている。だからこうやって壊れかけの俺をつついては、少し形状を戻して、壊れない範囲で彼だけが楽しい遊びを再開する。

「知ってますか、千晴さん。乳首でイクと、全身の感度も良くなっちゃうらしいですよ。だから今の千晴さんは、とってもエッチな身体になってしまってるんでしょうね」

「や、もう、嫌あ...！」

「ああ、すいません。僕としたことが、またあなたを焦らしてしまいました。ちゃんにご褒美をあげると言ったのに」

「っ！？もうもらいました！ご褒美はいっぱいもらいましたから！」

「どうしたんです。さっきはあんなにイキたがってたじゃないですか。遠慮しなくていいんですよ？」

「違う、いらない、ホントにいらないっ！もうご褒美はいらな、あ、あ、舐めないで、ッ、イキたくない、もおイクの、いや、いやああああ...っっ！！」

真っ赤になった乳首を、ねっとりと舐めまわされては吸われて、甘くつままれる刺激で、俺は一体何度イカされたんだろう。しまいには息を吹きかけられても腹が跳ねるくらいまで敏感にされた。もはや口を塞ぐことに両手は使えない。また舐められるのが怖すぎて、俺是那月さんが口を離れた隙に、慌てて両胸を隠していた。

「どうしたんですか？胸を隠したりなんかして」

「も、もう、ダメなんです、胸が、おかしくなってて...！」

「分かりますよ。僕も千晴さんを見ると、胸がドキドキしておかしくなってしまうようになりますから。いわゆる恋の病っていうやつでしょうね」

でも俺の防御を、彼はどうもねじ曲がった解釈でとらえたいらしい。那月さんの話は色々とトチ狂っていて、あんたは何を言っているんだと素で返事をしそうになった。それを冷静に押しとどめた自分を褒めてやりたい。あなたのそれは本当に病気かもしれないから、一回医者に行けとも思うが、今は自分が逃げるのが先だ。良く分からないが満足したなら、早くデータをくれ。

だが俺の期待を裏切る天才は、胸への興味は薄れた一方で、別の場所へと責める対象を変えた。そこが男としては最も弱いところだったから、俺もついうっかり気分を変えられてしまう。

「でも恋をしていても、スッキリしたい気持ちはありますよね？どうですか？そろそろこっちでもイキたくなってきたんじゃないですか？」

「んは、あ、ああゝ...っ！」

つつ、と山を張った布の下から上に指を這わされて、俺はつつい彼の手を目で追っていた。ゆっくり上下する指先が、そろりと内側に入ってきてそんな雰囲気を見せると、反射で腰を浮かせてしまう。

「ッ...！あ、あっ、あああ...！」

「ここ、下着の上からも糸引きちゃってますよ？ずうっと放置されてて、おあずけが長かったですもんね？」

「ふあ、あ、あ...っ！」

正直、布越しに撫でられるのもたまらない。だけどおそらく、直接触られたらもっと気持ちいい。いや、気持ちいいのもそうだけれど、今度こそきちんと射精できそうなのもポイントが高い。

ああ、言ってしまいたい。直接触ってくれと、はしたなくねだったらどうなるんだろうと思ってしまっている。息が荒い。もう彼の手から目が離せなくなった。ダメだ、止められない。いや、いっそ妙に焦らされるよりは自ら落ちる方がと、この時の俺は自分への言い訳ばかりを考えていた。

「ッ、あの、そこ...！」

「ん？どうしました？」

「や、あ、あ、う...」

「千晴さん？きちんと言ってくれないなら、気持ちいいこと止めちゃいますよ？」

「っ！あの、そこ...！下着の上からじゃなくて...、直に、触ってください...」

言わされたとはいえ、みっともない台詞だという自覚はある。でも言わなければ触ってもらえない。だから言っただけだ。さすがに彼の目を見て言うことはできなかったけれど、言葉にはした。ひとつ壁は超えたはずだ。

実際、俺のおねだりに那月さんはとても満足したようだ。そっと頭を撫でた後、俺の額にキスまで落とすサービスっぷりを見るに、相当ご機嫌ではある。

「ええ、もちろんです。でもたくさん我慢出来た分、とびっきり気持ちよくしてから触ってあげます」

「え？」

ただし彼から言われた言葉には、完全に疑問しかなかった。とびっきり気持ちよくするとはどういうことなんだ。別に普通に触られても、相当気持ちいいはずだと、俺は首をかしげてしまう。そんな俺に軽く笑顔を見せた那月さんは、ベッドのどこかに手を伸ばして、ボディクリームのようなチューブを手にとった。それが何か分からなかった俺は眉を寄せて見ていると、彼は俺の下着を軽く持ち上げて隙間を作り、そこにチューブの先を挿し込んだ。何をしているのかと俺は驚くと、そこから出てきた冷たい液体の感触に、ぶわっと鳥肌が立つ。

「ひっ！！？や、何っ！？」

「安心してください。これはただのローションですから。この中をたっぷりぬるぬるにして、それから触ってあげますからね」

「ッッ！！？い、いいです、そんなのいいからっ！」

「こらこら、どうして暴れるんですか。冷たくて驚いちゃいました？」

「うあああ...っっ！ま、って、こんなっ、こんなにいっぱい、いらなない...！」

性的知識が乏しい俺は分からなかったが、どうやら彼が手に取ったチューブはローションだったらしい。それが分かったのはいい。だが、問題は俺の下着の中がローションまみれにされていることだ。

待て待て、なんでそういう余計なことをしてくるんだ。普通に触ってもイクって言ってるだろ。どうしてそこに、摩擦を軽減して感じやすくする小細工を入れてくるんだ。しかも多い。もはや無駄使いだ。シーツに染みるほど出す必要があるのかと、次々に文句は浮かぶ。だけれど、下着の中は既にぐしゃぐしゃだ。ありえないくらいに濡れたそこは、先端以外も下着の色が変わっている。

ぬぽんとチューブが引き抜かれた後、するりと彼の手が入り込んできた。その手の気持ちよさと言ったら、まさに感無量というべきくらいのレベルだった。思わず甘ったるい息がこぼれて、くたりと彼に身体を預けてしまう。

「はううううう...！！ん、んんうっ」

「ね？ぬるぬるが癖になるでしょ？」

「あふ、う、っ、は、はああ...！」

ぬちゅり、ぬちゅりと、軽く握られただけでもかなり感じる。そもそもが濡れまくっていたのに、ローションが足されたことで、下着の中が大洪水だ。ローション溜まりの中で指が動くと、もう言葉に出来ないくらい気持ちが悪くて、言葉も思考も溶けていく。

「んはあああ...！ああうん、んっ、んんん！」

「千晴さん？もっと足を開いてください」

「っ、あ、ああ、だ、め、できない、気持ちくてできなっ」

「感じすぎちゃいますか？」

「~~~~ッッッ！！」

ゆっくり扱かれたら、腰がとろけるほどに感じてしまって、俺は何も言えなかった。別に意識して内股になっているわけじゃないけれど、反射で足を閉じてしまう。でもこれは俺が抵抗しているわけじゃないからか、そこまで怒られることはなかった。むしろ那月さんのシャツをぎゅっと握る仕草がお気に召したのか、腰に当たる彼の熱が膨張していたくらいだ。

「あああ、も、イク、イッちゃい、ますう...！」

「ええ、いいですよ。パンパンに張ったここから、いっぱい出してくださいね」

「ふああ、あ、で、る、ああイクイク、ッ、う、ううううんんんっ！！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー